

恒之進と覺之助

平成二十九年 七月

恒之進と覺之助は天保六年生まれの同じ歳の従弟です。その人生は大きく違っており、恒之進は父源右衛門正方が三十二歳でなくなり、数えて十歳で四代目として家督を引き継ぎました。先代達が残した広い土地の郷土経営などの大役をこなしていきます。覺之助は長崎に留学し、本家の養子に行きその後勤王の志士として活動します。二人の従妹の人生を恒之進から見えます。

●恒之進は勤王か佐幕か

本家の平八正秀の長男宗七が十四歳で亡くなっているのが、恒之進は近縁の中で一番年上の男子です。安岡權馬正徳、安岡覺馬正慎の二人の弟、山北(お西)に安岡覺之助正美、安岡嘉助正定、安岡道太郎正寛の従弟がいます。恒之進を除き勤王黨に近いとの記録があります。田中光顯などが作った瑞山會を著者(坂崎斌(紫蘭)が上梓)とした「維新土佐勤王史」があります。そこに「土佐勤王黨血盟者姓名簿の寫」が掲載されています。安岡家関連は次の三人の名があります。

安岡覺馬正慎、安岡權馬正徳、安岡覺之助正美

吉田東洋を暗殺した安岡嘉助、那須信吾、大石団藏は当然血盟していると思いますが、載っていません。武市半平太(瑞山)が名簿を容堂に出すときに累が及ぶから消したとのことです。道之助(道太郎)の名はありません。若いと聞いています。年齢が近い覺馬が十九歳で血盟、そのとき道之助十五歳です。その差でしょうか。この名簿を一時安岡覺之助が自宅(本家)に預かっていました。覺之助が藩に捕縛される時に大石が持ち出し門田の家に預けたが、その後紛失した事になっています。こ前述の通り名簿が「寫」となっているのはそのため、瑞山會の人達の記憶で作成したでしょう。

血盟の記録がないこと、前述の経歴から恒之進は佐幕派と思っていました。恒之進が佐幕派であったのであれば弟覺馬、權馬、そして従弟二人覺之助、嘉助と藩のことについて話をしたのででしょうか。

恒之進は本当に佐幕派だったのででしょうか。これに関して「松野尾章行集、土佐之国史料類纂『皆山集』」の第五卷に次のような記載があります。

文久元年八月江戸で武市半平太、大石弥太郎が連判帳の主旨書を作成し連署血判し、弥太郎が半平太へこの連判帳を国に持ち帰り同志を募れと説き、半平太は帰国します。そのとき、弥太郎が香美郡では「森助太郎、池蔵太、安岡覺之助、安岡恒之進、同嘉助、同權馬、大石弾藏等あり宜しく盟に加ふへし・・」とあります。つまり、安岡恒之進は勤王黨への加盟の可能性が高いと言っています。また、武市半平太は刃道で名が知られており勧誘活動がし易いとの大石の言葉、武市は自費で江戸に来ており、弥太郎は藩命(「勤王者調べ」に洋学修行)で来ているなどから半平太が先に帰国した。

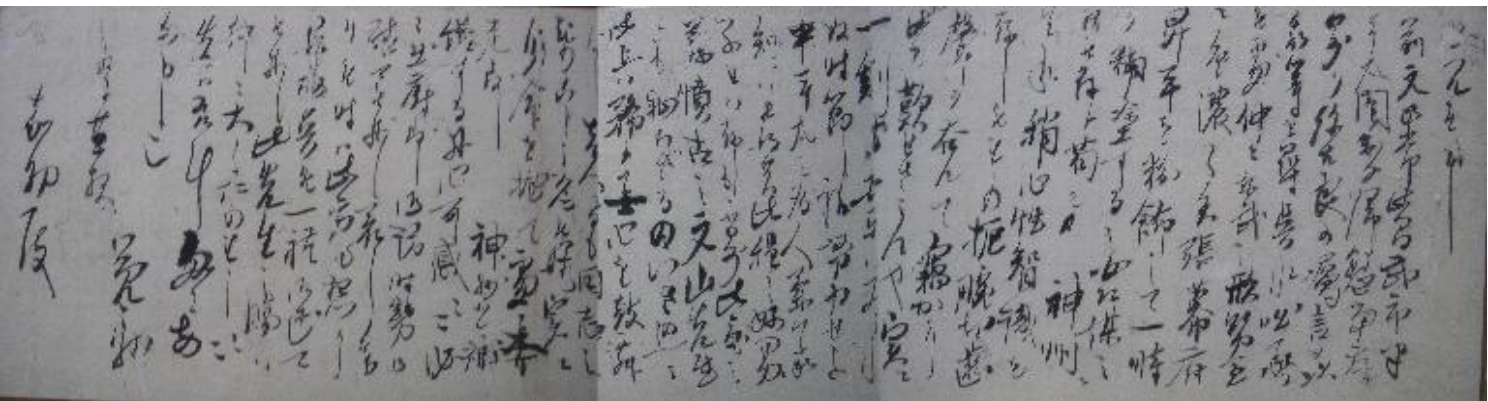
この連判帳主旨を江戸で作成した時の連署に、岡田以蔵も加わっています。それに関して次の記述があります。「・・弥太郎鍛冶橋邸に寓する時武市と相對ニ坐し岩間の盟約書を開き武市ニ示せる時梯子段より顔を出して窺ふものあり兩人其不意なるニ驚き巻物を捕りて武市之を懷中ニ藏メたりしも以蔵ハ已(さ)ニ之を認たる後二て悔ゆるとも及ハす捨置たらんニハ後日の害は計りかたく不良なる人物トハ存知ながら盟中へ加へたり」とあります。内容から、この記述はその場にいた大石弥太郎(圓)の書付か、記憶に基づくと思います。

「皆山集」の第五巻にも舊高知藩勤王人名録の項があり、そこに恒之進は「武市氏同志名簿中盟約書ニ漏ル者」の項に掲載されています。大石弥太郎と恒之進がどのような間柄か不明ですが、大石には恒之進は思想的には勤王黨の主旨に合った人だったのです。ですが、血盟したとの記録がありません。家の存続のため勤王黨の思想を隠したのでしょうか。そうであれば覺之助とこの点は違います。

平尾道雄著「土佐藩」の参考資料一覧で「皆山集」は史料、「維新土佐勤王史」は著作に分類されています。また、瑞山會は大石圓(弥太郎)は名を連ねていません。瑞山會の集まりが東京で開かれたこともあるのでしょうか。¹

●覺之助と武市半平太の勧誘

大石弥太郎と主旨書を作成した武市半平太は、同志を募るため帰国の途に着きます。その頃、文助日記によると「四月廿一日覺之助道之助大坂御陣家詰被仰付」滞在していた覺之助が武市半平太の勧誘の話を聞きます。そのことを弟の嘉助に次の手紙を送っています。



他見無用
前文乃常此間武市半平太関東より帰り当方江寄り弥太郎の囑言以我等を尋呉れ咄承候處仲々東武之形勢急に色濃く矢張幕府昇平を粉飾して一時を糊塗する□姦謀の様存し奉候苟も 神州ニ生まれ稍心性智識を存し候もの扼腕切齒聲ヲ吞んで竊か耳此を歎せさらんや實ニ一刻も安樂尔とい能られぬ時節諸努力せよ半平太之爲人兼て承知候ハ能得共此程之好男子とハ存しもよらず此度之義憤古之文山先生ニも恥ぢざるのいき込を此上ハ務めて土心を鼓舞致し吾人ニテも同志之勢古しらえ候様實ニ躬命を抛て處々奔走致し 神州を補繕する丹心可感し必々出府致し御訪時勢御聴下サるべき候若し参り候時ハ此方懇ろ耳尋ねて呉候一禮御述て下サるべく候此先生乃腸ハ仲々大きくたの毛しく先づハ右ばかり勿々奈かしこ

九月廿六 夜
嘉助殿

右下段の赤い四角の「弥太郎の囑言」が勤王黨の主旨書でしょう。武市半平太が熱烈に語ったこと、それに覺之助が感動したことが分かります。「他見無用」とあるので嘉助は恒之進などにこの話はしていません。これを読んだ嘉助は兄が戻る前に武市に会い翌年四月に吉田東洋暗殺に加わり脱藩します。権馬、覺馬への勧誘に武市半平太などが来訪したか、二人が会いに行ったか不明ですが、二人は勤王黨へ血盟しています。嘉助に(文久元年)九月に手紙が来て、翌年四月の脱藩までどのように過ごしたのでしょうか。嘉助の父文助の日記に嘉助の出府記録が記載されています。安政四年に5回出掛けていますが、文久元年九月に手紙を貰った以降、記載漏れかは不明で

すが、出掛けたとの記録はありません。血盟の時期、吉田東洋暗殺計画を受けた時期など不明ですが、嘉助が家で文助とどんな話をしたのでしょうか。

●恒之進と覺之助を並べると

恒之進と覺之助は共に天保六年の生まれの同じ歳です。幼少時代、弓術と一緒に励んだ記録があります。その後の歩んだ人生は大きく違っていきます。恒之進、覺之助のことを文助日記などの記録を時系列に並べると次のようになります。

弘化元甲辰 九月十五日兄源右エ門病死世倅倅恒之進幼年ニ付公文後見ニ而

十一月無相違相続被仰付

弘化四丁未年 正月十一日御駆初首尾能相濟此年甥恒之進初而乗馬黒鹿毛上馬ニ而首尾能相勤

嘉永四年亥 正月廿九日此日恒之進婚禮

此年躬覺之助代勤奉願御聞届之上代勤ニ出ス

嘉永六年癸丑 正月十三日曇御駆初有之恒之進相勤首尾能相濟

六月三日覺之助本家江養子参ル

安政元 二月末日公文勘十郎足達徳右エ門安岡恒之進野戦砲車共出来

安政三丙辰 正月十一日御駆初雨天此時覺之助相勤首尾能相濟

六月十五日覺之助長崎表江出足晴天

八月四日曇小雨少ふる此日恒之進婚禮

八月七日日和此日恒之進江戸江出足山田宿

安政四丁巳 二月廿日風吹晴今日長崎より吉田良太郎便りを以書状来ル

覺之助長崎表江江戸表江戻候与力蜷川藤五郎殿ニ從而修行参ル

閏五月廿八日朝薄曇昼より少雨ウナキ取ニ行ク此日江戸状来ル

(岩井孫六日記に閏五月十一日安岡覺之助俄ニ帰国ノ由ニテ、当御屋敷へ立寄)

六月二日和此日覺之助滞宿

六月廿八日朝曇四ツ時より少雨ふる少雷鳴恒之進江戸状来ル

十一月六日恒之進帰宿

十一月八日婚禮

安政五戊午 二月廿三日公文勘十郎四十二賀

六月廿日本家平八病死

九月十五日覺之助御呼出家督無相違相続被仰付候

左記資料で恒之進と覺之助を比較してみます。

◆家督相続と結婚

恒之進は弘化元年父の死去により数えて十歳で家督を相続します。幼いため後見人に叔父の公文勘十郎を立て、歳を十三歳に偽っています。そのことが文書「記録帳」に記載されています。幼く家主となります。周囲に賢い番頭もいたのでしょうか、家を動かして行きます。一方覺之助は嘉永四年十六歳で父文助の代勤をしています。家督を相続したのは二十三歳です。本家に養子に行き養父平八正秀の死去による相続です。嘉永六年本家に養子に行きます。

恒之進は嘉永四年十七歳で本家の万喜二十歳と結婚し長女馬子が誕生します。誕生の直後、別れ万喜は本家に戻ります。本家の平八正秀に嫡男がいなかったため本家に養子に来た覺之助と結婚します。覺之助が養子に行くのと同じ頃万喜は本家へ戻っています。本家の家督を相続するためにこのような手順を踏むのでしょうか。安岡の系図

をみると、婿養子に来て家を相続しています。男養子に来て嫁を貰い受けた例がありません。他家から来て養子となり嫁を貰い受け家督を相続することを禁じていたのだろう。幼い養子縁組も役所へ届けていますのでそのような決まりがあったと推定できます。大名クラスでは嫁入も幕府の許可が必要だったようです。養父平八正秀が六月に病死し審査したのか三ヶ月後の九月に、覺之助は「御呼出家督無相違相続被仰付候」と家督が相続できています。文助は何故、二男嘉助でなく長男覺之助を養子に出したのか、嘉助では若かったのでしょうか。

◆御駆初

土佐の郷士には重要な正月の行事がある。御駆初である。甲胄姿で馬に乗り高知の城下を藩の家老などが見る前で駆け抜けるのである。この行事に地域から選抜され参加します。文助日記にそのことが「正月十一日御駆初首尾能相済」に続けて参加者の名とともに毎年記載されています。

恒之進の父源右衛門は父廣助の家督相続した後の天保十三年に参加し、その四年後弘化四年恒之進十三歳で参加し、さらに六年後の嘉永六年にも参加しています。覺之助は恒之進に遅れること九年の安政三年に参加しています。参加者の名は毎年異なりますので、何か選抜の条件、順番があるのかも知れません。お下の参加回数が多いような感じがします。

◆弓術と砲術

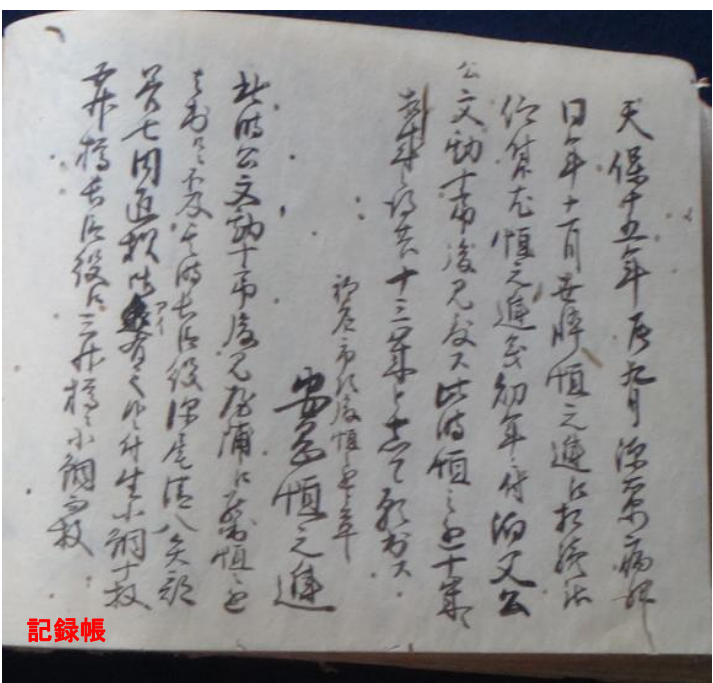
天保十四年恒之進、覺之助が八歳の頃、一緒に弓術を励んでいます。天保十四年正月七日から十二月七日に覺之助は百五十二日、市次恒之進幼名百六十六日、父源右衛門は二百十三日弓術の練習を務めています。一年の三分の一、三分の二弓術をしています。弓も子供用があったのでしょうか。覺之助は子供の頃から大人びた名の覺之助だったのだ。因に弟の嘉助は陽次郎が幼名であった。

二人が成人となる頃には弓術は廃れ、嘉永を過ぎると弓関連の文書がなくなり、砲術、火術の修得が盛んになります。火術初傳目録免許皆伝を高村造酒丞から嘉永七年寅六月に安岡恒之進は受け、安政元年に恒之進は野戦砲を作っています。安政三年に覺之助は長崎の留学し、恒之進は江戸に留学しその目的は砲術の勉強のようになっています。この留学に前述の免許皆伝を当てた高村造酒丞も同行しています。覺之助の留学は自費と思われませんが、翌年に役人と江戸に向かっていますので、藩命だったのでしょうか、江戸では短期間の滞在で帰国していますので自費とも思われます。二人が取得した砲術の技術力は不明です。

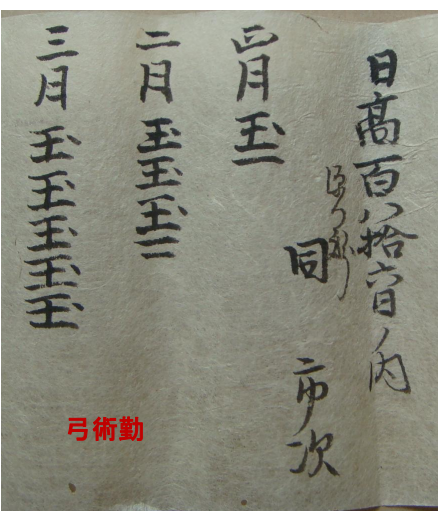
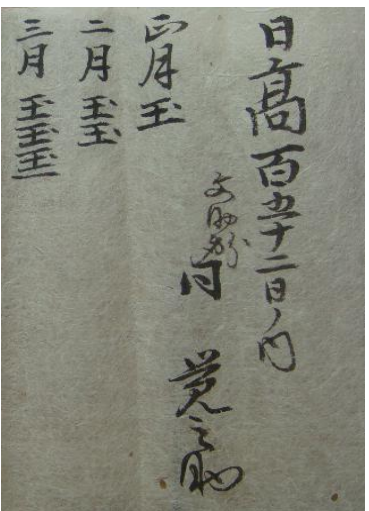
◆死出の旅

恒之進はもう一度江戸へ行く機会がありました。前回の江戸行きから七年後二十八歳の時、山内豊範の参勤に随行して江戸に向かいます。覺之助からの手紙は伏せられていたでしょうが、土佐では勤王黨の話題が飛び通っていた頃です。この参勤に関して「平尾道雄著・土佐藩」に記載があり引用します。

当初三月が豊範の病氣、吉田東洋の暗殺などもあり延期され発駕は六月二十八日となりました。その随行員数は『官武通記』に二千人と伝わっています。その中に勤王黨の同志も参加したそうです。この参勤が姫路に到着する



記録帳



弓術動

頃、麻疹に罹るものが『隅山春秋』に二千人とあります。前述の随行員数と出典資料が異なりますので単純比較はできませんが、大部分の人が罹ったでしょう。その病人の一人に恒之進がいたのです。そして、大坂で亡くなります。大坂の齡延寺に立派な墓が、同じく病死した土州の人の墓と並んでいます。祠堂證文(永代供養料)を文久三年に寺と取り交墓の位置は移動しましたが、今もこの寺で供養されています。その死の床で書いた手紙には、家の安堵を奉願をこの参勤に側用役であった高屋友右衛門宛に出しています。効果があつたのか家は続きました。

覺之助は恒之進死後の翌年、勤王黨取締で親類預りとなり、翌年嘉助が処刑され、翌年覺之助は投獄されます。恒之進が残した家も相続した弟覺馬の死で継続が危なくなります。覺之助は幕末放免され、戊辰戦争に参戦し会津で戦死します。戦死した日の戦いは激しく、多くの人が亡くなっています。戊辰戦後、会津の人たちが墓標を作ってくれます。

◆そして二人は

表紙がなく年代の表示もないので直接的には何を記載した資料かわかりませんが、書かれている名から恒之進の葬儀見舞客リストと推測しました。恒之進は大坂で病死し大坂の寺に埋葬されましたが、それとは別に地元で葬儀を行ったでしょう。下写真は見舞客リストの一部です。写真の赤枠に山中左之助・坂本権平(状とあるので見舞状だけか)、その隣に貞岡直八(山北みかんの原種作成者)、青枠に赤岡魚屋、薄青枠に大石弥太郎、黄色枠に岩井十蔵(岩井孫六)などが読めます。他の頁に書かれている名を含めると次のようになります。安岡覺之助、安岡文助、安岡壽吉(高祖父から恒之進祖父郷土職譲受)、山崎又七(恒之進後妻の実家)、山本安次(母方の伯父・江戸留学の仲間)、門田八十八、公文守太郎(従弟・後の公文俊章)、山中左之助(貢物納所の管理者)、坂本権平(坂本龍馬の兄)、大石弥太郎、谷作七、岩井十蔵の倅(岩井孫六)、地元の方々、和食村の方々、その他数多くの見舞客が来られています。十歳で家の主人として働き、二十八歳と若くして亡くなった恒之進の付き合ひの広さを示しています。

覺之助にそのような葬儀が行われたとの記録は見当たりません。山北の四坊墓地に覺之助と嘉助、そして文助妻の墓は同じような石で作られています。明治初期文助は文須、文輔と改名しています。妻の墓に文輔妻と彫られていますので、明治初期に山北を離れるときに作ったのでしょうか。また、嘉助の墓に次の歌が刻まれています。「二度ハ来へき世ならぬ我身をもすつるハ君が御為なりけり」(この歌は皆山集に「大和ニ赴く日和歌一首を友人ニ送る」とあります。友人は大石弥太郎と推測)。文助が

墓を作った明治初期に大石と会い歌を知り刻んだのでしょうか。山北の墓地で夫婦対でないのは恒之進、覺之助、嘉助と文輔の妻です。小高坂山の文輔の墓石はこれらに比べると本当に小さい墓石です。

